『千葉大学 ユーラシア言語文化論』22（2020）：297-314

第二言語習得における母語の影響
-中国語母語話者の日本語の漢語の習得を中心に-

劉 思柔

キーワード：第二言語習得　母語の影響　漢語

1. はじめに

中国語と日本語は異なる言語類型に属するが、両国は共に漢字を使用する漢字文化圏に属しており、世間では、「同文同種」と言われる。語彙面での交流は古くから続いており、千年以上の歴史を持つ。明治維新までは、中国から日本へ一方的に流入したが、中国への日本語語彙の逆流入が 19 世紀末から始まっている。それゆえ、日本語と中国語には同じ漢字によって表記される語彙が多く存在している。中国語母語話者は日本語学習に有利であると考えられている。

しかし、様々な理由により、漢字表記が同じであっても、意味が全く異なる場合が多々存在する。従って、李（2006）は「中国人学習者が、自分の持っている中国語の漢字知識のみに基づいて日本語の漢語を使うと、日本語とは異なる意味・用法を持つ場合は誤用となる。中国人学習者は、この点に注意を払う必要があるが、このことを忘れる傾向にある」と述べている。言い換えれば、中国語母語話者は母語の漢字知識を利用して、それら漢語の意味を推測する能力はあるが、推測された意味は必ずしも正しいとは限らないということである。

そのため、中国語母語話者が日本語の漢語を習得する際に、母語がどのような影響を与えるのかについて明確にするだけでなく、習得に容易な点と困難な点をあわせて考察する必要がある。

本稿[1]は、第 2 節で漢語の定義とここで扱う範囲について説明する。第 3 節では、漢語における対照分析と誤用分析、第二言語習得における母語に関する内容をまとめた上で、先行研究の内容を概観する。第 4 節では各タイプの漢語の学習状況と難易度を考察するために、劉（2019）のアンケート調査結果を分析する。

2. 漢語の定義と扱う範囲

[1] 本稿は著者が 2019 年度に千葉大学大学院人文公共学府に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

日本語の語彙の種類は一般的に「和語、漢語、外来語および混種語」に分けられる。「漢語」は日本語の語種の一種である。陳（2003）は、「漢語」は、日本語の固有の言葉である「和語」に対する中国起源の言葉を指すと定義している。しかし、小森（2010）は現代の日本語で用いられる漢語を、中国から日本に来たものと日本で作られたものとの二種類があると述べている。また、文化庁（1978a）は「漢語」の定義について次のように述べている。

> 漢語という用語は、和語と対になって使われ、中国に起源を持つ語と考えられるが、これには問題がある。この定義に従うと、日本人が工夫して作った「大根」、「出張」などの和製漢語が除かれてしまう。そこで、漢語は「字音によって読む語」と定義する。
>
> （文化庁 1978a：48）

従って、狭義の「漢語」は中国から入ってきたことばを指す。広義の「漢語」には、漢字の字音によって成立する中国に起源を持つ語と、日本人が自発的に作った語の、2 つが含まれることとなる。本稿で取り上げた「漢語」は、広義の「漢語」に属するが、「二字の漢語」のみとし、三字以上の漢語（自動車、飛行機や、一朝一夕、魑魅魍魎など）は除外した。

3. 先行研究

3.1 漢語における対照分析

中国語の漢語と日本語の漢語に関する対照分析は少なくない。その中の一番代表的なものは文化庁（1978b）の『中国語と対応する漢語』であろう。文化庁（1978b）は初級・中級・高級の三種類の教科書から 2000 語ほどを分析対象として取り上げた。その結果、漢語の分類は以下の 4 種類であると結論付けている。

S（same）：日中両国語における意味が同じか、または、きわめて近いもの。

例：安全 意外 椅子

O（Overlap）：日中両国語における意味が一部重なってはいるが、両者の間にずれのあるもの。

例：意見 一時 家内

D（Different）：日中両国語における意味が著しく異なるもの。

例：曖昧 自覚 新聞

N（Nothing）：日本語の漢語と同じ漢語が中国語に存在しないもの。

例：封筒 風呂 倒産

4種類のうち、日中語で意味が同一の漢語（「S」類語）が最も多く、全体の3分の2を占めている。意味が完全に異なる漢語（「D」類語）と意味が一部重なっている漢語（「O」類語）は全体の12分の1、中国語に存在しない漢語（「N」類語）が、全体の4分の1を占めている。

以上の結果からみると、日中語で意味がほぼ同じ漢語が大きな割合を占めているため、中国語母語話者の日本語習得は容易と考えられる。しかし、連（2013）は、「日中同形語の意味が同じ場合でも、言葉の使い方は必ずしも同一とは限らないため、中国語の漢語を日本語にそのまま持ち込むと、不自然な日本語になることもある」と指摘している。

また、武部（1979）は、中級教科書のひとつの課に出てきた 150 語の漢語を取り出して、教える立場からの視点で漢語を分析しており、「S」に分類された語は漢字の知識がある学習者は正確に理解することができるため、教える立場からすると、問題がないと述べている。「N」に分類された語は中国語に存在しないため、中国語母語話者にとって理解できないことから、教える立場からすると、丁寧に教える必要があると指摘している。中級段階では「O」と「D」に分類された語には誤解が起こりやすいので、教える際注意すべきであると述べている。

また、文化庁（1978b）の分類に基づき、李（2006）は、以下のように、さらに詳しい分類を提示している。

タイプ1：「日＝中」：日本語と中国語の意味がほぼ同じもの。

タイプ２：「日≠中」：日本語と中国語の意味が全く違うもの。

タイプ３：「日＜中」：日本語の意味の範囲より、中国語の意味の範囲の方が広いもの。

タイプ４：「日＞中」：中国語の意味の範囲より、日本語の意味の範囲の方が広いもの。

タイプ５：「日＜=＞中」：意味の重なる部分もあり、違う部分もあるもの。

3.2 誤用分析

誤用分析は、学習者の誤用を収集し、それが起こる原因を分析し、学習者の習得状況について明らかにするという研究である。

張・谷守（2013）は日中同形語の誤用について分析している。「参考」、「緊張」、「注意」、「一時」という 4 つの漢語を典型的な例として挙げ、新たな視点から同形類義語の意味の共通部分の誤用例を探して、分析を行った。その分析によって、日中同形語が意味を共有する部分は誤用を招きやすいという点を指摘している。そして、中国語母語話者の母語干渉による誤用は、日本語文章の作成時や会話時にしばしばみられるとの調査結果を指摘している。このことから、日本語教育の現場では、学習者の誤用を防ぐために、単に意味の共通点や相違点を説明するだけでなく、語の持つイメージも教える必要があると主張している。

大河内（1997）は、学習者の学力に応じて生じる誤りは様々であると指摘している。日本語の二字漢語を用いる際に生じる誤りが学力によって異なることを明らかにするために、大河内は、留学生の日本語文と中国の日本語版定期刊行物の、それぞれの誤用例を取り上げている。

留学生の誤用例：

1　党中央と毛主席の<u>関心</u>と指導のもとに、 ……（配慮）

2　このように日本軍国主義に抵抗する戦争が<u>爆発</u>したのであった。（勃発）

（大河内 1997：413）

例文 1～２の下線部分の語は、（　）内の意味を表そうとしている。それを表すために、中国語での用法をそのまま日本語に当てはめたのである。大河内（1997）によれば、それは初歩的な誤用例だが、漢字表記語であるがゆえに生じる誤りである。

中国の日本語版定期刊行物に見られる誤用例：

3　40 年らい、国連は、曲折した道をたどってきた。<u>厳重</u>なミスもおかしたが、総じていえば……

4　倦むことのない研究は、やがて<u>豊富</u>な果実を結び、科学研究上の<u>重大</u>な成果がついに誕生した。

5　遺伝工学は、70 年代にはじまったばかりの新しい学問分野である。それは工業、農業、医学、薬学の発展に<u>深刻</u>な影響をおよぼすだろう。

（大河内 1997：413-414）

大河内（1997）の説明では、「厳重なミス」、「重大な成果」と「深刻な影響」は、それぞれ、「重大なミス」、「偉大な成果」と「深い影響」とするのが正しいとのことである。また、誤用の「厳重なミス」、「重大な成果」から、中国語の「严重的错误」、「重大成果」が透けて見えるそうだ。これは、中国語漢語の知識の中に、日本語を逆もどりさせているために生じると指摘している。また、大河内（1997）は例文 3～5 を中国の日本語版定期出版物から取り上げたが、これにはかなりレベルの高い誤りが含まれており、日本語のレベルが比較的高い書き手たちであっても、母語の影響から逃げられていないように思われるという。

張・谷守（2013）、大河内（1997）の行った中国語母語話者の日本語の誤用分析によれば、母語の影響がマイナスに作用し、中国語の意味をそのまま日本語の文に使ってしまうという事実が認められるという。従って、日本語教育現場では学習者の誤用に気付いて、早く誤りを訂正するだけでなく、各漢語の持つイメージやニュアンスを学習者に教える必要がある。しかしながら、学習者は何回訂正されても、誤りを克服できない誤用もある。学習者の誤用原因を全面的に分析すべきであろう。

3.3 第二言語習得における母語の影響に関する研究

では、中国語母語話者が日本語の、特に漢語を学習する際の母語の影響は、どうなっているだろうか。

張（2017）は、中国語母語話者の日本語の習得を研究するために、同形類義語（Overlap 語）を中心に、調査対象者が文の正誤を判断するという形式によって、日本に留学中の中国語母語話者の日本語学習者（計 12 名）を調査した。張（2017）の得た結論では、文の正誤を判断する際に、母語である中国語の漢語知識からの転移がみられた。また、意味範囲の広さと意味使用の一般性からみると、同形類義語（Overlap 語）の習得は中国語の漢字知識から正の干渉ではなく、意味使用の一般性が一致すると、負の干渉が働き、意味使用の一般性が一致せず、意味範囲が広くなると、負の干渉も潜在的に存在すると述べている。

また、李(2006)は、中国語母語話者の日本語学習者による日中同形語の習得において、負の転移と同時に正の転移の実態をみるために、2 つの調査を行った。

李(2006)の調査により、誤用されにくい同形語は、以下の 3 種類であることが判明した。

1.「日＝中」(日本語と中国語の意味がほぼ同じもの)、

2.「日＜=＞中」(両言語は意味の重なる部分もあり、異なる部分もあるもの)、

3.「日≠中」(日本語と中国語の意味が全く違うもの)、

一方、習得が困難で誤用されやすいのは、

4.「日＜中」(日本語の意味範囲よりも中国語の意味範囲の方が広いもの)

5.「日＞中」(中国語の意味範囲よりも日本語の意味範囲の方が広いもの)

である。また、学習者のレベルが中・上級でも、この種類の同形語の誤用が依然として存在し、誤用率もほとんど変わらないという点も指摘されている。このことから、中国語母語話者の日本語学習者は、同形語を学習する際に、母語である中国語の意味に従いながら日本語の意味を推測する傾向があると結論付けている。

4. 調査

4.1 仮説

劉（2019）では、李（2006）の分類法を用いて、以下の仮説を立てた。

(1)「日＝中」日本語と中国語の意味がほぼ同じ。母語からの正の影響を受けるので、中国語の母語話者にとって、習得するのは容易[2]であろう。

(2)「日≠中」日本語と中国語の意味が違う場合は認識しにくいので、このタイプの習得は困難だろう。

(3)「日＜中」このタイプの語は中国語のほうが意味的には範囲が広く、日本語の意味は中国語の中に含まれているので、中国語母語話者の学習者は容易的に母語の知識を用いて意味を理解できるだろう。つまり、習得が難しくない。しかし、使う時には母語にしかない意味をそのまま日本語に使わないように注意しなければならない。

(4)「日＞中」このタイプの漢語は日本語のほうが意味的には範囲が広く、中国語の意味は日本

[2]難易度の定義について、正答率と学習歴二つの方面から分析を行うことになる。正解率が高いと習得がしやすい、正解率低いと、習得が困難である。そして、学習歴が短く、正解率が高いと習得がしやすい、学習歴が長く、正解率が低い場合は習得が困難であると認める。

語の中に含まれているので、母語の干渉で日本語漢語の意味推測が難しくなる可能性もある。そして、日本語のみの意味（母語にない意味）を意識的に覚えなければならない。このタイプの漢語は習得困難であろう。

（5）「日＜=＞中」のタイプの漢語は中国語独自の語義、日本語独自の語義と日中語共通の語義３つ部分の意味範囲があるので、中国語母語話者は各範囲の意味を意識的に区別して意味判断を行う、母語の負の影響があり、容易ではないであろう。

4.2 調査方法

仮説を検証するために次のような方法を取った。

4.2.1 調査被験者

中国語母語話者が日本語の漢語を学習する際に母語の影響があるかどうかを検討するために、130 名の中国人日本語学習者を探した。しかし、そのうち８人[3]は日本語を勉強する期間が短く、日本語レベルが不明のため、データ分析から外した。最終的に、被験者は中国語が母語の日本語学習者 122 名となった。被験者の日本語レベルについては以下の通りである。

調査対象は全員日本語能力試験を受けており、各自のレベルは認定されている。日本語の能力はN1～N5五つのレベルに分けられている。日本語能力試験の公式サイト[4]には、初級・中級・上級の明確的な基準は示していないが、牧野・他（2001）は、N1は上級、N2とN3は中級、N4とN5は初級としている。筆者は、被験者の日本語のレベルだけでなく、学習歴も加えて調査した。調査被験者の情報は表1にまとめた。

表1：被験者情報表

レベル／学習歴	上級	中級	下級	合計
1 ヶ月～6 ヶ月	1 名	5 名	16 名	22 名

[3] 調査対象の日本語のレベルについて、日本語能力試験 N1、N2、N3、N4、N5、いずれかのレベルに合格認定されると、調査対象として認められる。しかし、この８人は日本語初心者のため、日本語能力試験に参加した経験がない。また、他の日本語の資格もないため、データ分析から外した。

[4] https://www.jlpt.jp/about/levelsummary.html

7ヶ月〜1年	4名	11名	11名	26名
1年1ヶ月〜1年6ヶ月	0	6名	1名	7名
1年7ヶ月〜2年	4名	2名	7名	13名
2年1ヶ月〜2年6ヶ月	0	0	0	0
2年7ヶ月〜3年	7名	3名	1名	11名
3年1ヶ月〜3年6ヶ月	0	1名	0	1名
3年7ヶ月〜4年	10名	9名	1名	20名
4年1ヶ月〜4年6ヶ月	0	0	0	0
4年7ヶ月〜5年	8名	1名	0	9名
5年以上	13名	0	0	13名
合計	47名	38名	37名	122名

4.2.2 調査内容

先行研究の対照分析のところで述べたように、李（2006）は文化庁（1978）の分類に基づき、漢語を五種類に分類している。本論文は李（2006）の分類を使って調査を行った。便宜上、分類に①〜⑤の番号をつけた。

①「日＝中」日本語と中国語の意味がほぼ同じものである。

②「日≠中」日本語と中国語の意味が全く違うものである。

③「日＜中」日本語意味範囲より中国語の意味範囲のほうが広いものである。

④「日＞中」中国語の意味範囲より日本語の意味範囲のほうが広いものである。

⑤「日＜=＞中」両言語は意味の重なる部分もあり、それぞれ重ならない部分もある。

本調査で使用した語彙は、文化庁（1978b）から選んだ語を除いて、先行研究の李（2006）と張（2017）から一部分を借用した総計58語である。調査用語彙は表2にまとめた。またアンケートは、二つの部分に分かれる。一つは、フェースシート部分である。もう一つは質問部分である。フェースシート部分は調査協力者の個人情報に関する内容、日本語のレベル、日本語学習歴などの問題を設定した。また、質問部分は二種類の質問を設けた。問題Iは、単一選択肢課題である、

四つの選択肢を設定して、一番適当な項目を選んでもらうことである。問題IIは、文の正誤についての判断課題である。これらの課題によって、中国語母語話者の母語が日本語の漢語の習得に影響があるかどうか、母語の知識を利用して選択肢の意味を判断しようとする傾向があるかどうか、使用する各タイプの漢語の難易度とその習得状況などを検証する。問題数は、問題Iは漢語28語を使用し28問、問題IIは30語を使用し46問、合計74問である。

問題数と被験者の日本語のレベルを考慮し、日中辞典・中日辞典[5]からできる限り短い文を取り上げた。それらの文はランダムに被験者に提示した。

表2　本調査用語彙表

タイプの類別	調査漢語
①「日＝中」日本語と中国語の意味がほぼ同じものである。	重要 I.27[6]　傾向 I.9　経験 I.24　訂正 I.3　返還 I.20 流行 II.45 状態 II.46 強調 II.12　負担 II.36
②「日≠中」 日本語と中国語の意味が全く違うものである。	主催 I.12　見学 I.13　格差 I.7　気配 I.17　好物 I.4 殺到 I1.4　看病 I.23　迷惑 I.21　夢中 I.8　暗算 I.11　講義 I.18 用心 II.23　用意 II.40　貧乏 II.37　下流 II.19　運命 II.25　素朴 II.11　休講 II.41　満点 II.18　放送 II.42　不信 II.6
③「日＜中」 日本語意味範囲より中国語の意味範囲のほうが広いものである。	出世 I.6　簡単 I.28　資格 I.1　関心 I.25　緊張 II.8・32　解決 II.15・28　修理 II.29・31　質問 II.20・35　入手 II.4・21　感激 II.7・30　栽培 II.10・16

[5] 『日中辞典』(2002) 小学館。『日中辞典』(1994) 小学館。
[6] 調査用語の後ろの番号はアンケート調査での設問番号である。例えば：I.27 は問題 I の 27 番目の問題である。

④「日＞中」 中国語の意味範囲より日本語の意味範囲のほうが広いものである。	大事 I.5　風景 I.22　監督 I1.6　呼吸 I.2 愛情 II.3・26　性格 II.5・38　処分 II.1・22 現金 II.13・39　入口 II.33・43
⑤「日＜=＞中」 　両言語は意味の重ねる部分もあり、それぞれ違いの部分も持つものである。	単位 I.19　得意 I.10　専門 I.15　把握 I.26 深刻 II.9・24　下手 II.17・34　意見 II.2・27 大家[7]II.14・44

4.2.3調査方法

本調査は「问卷星」というWebを使ってアンケート調査を行った。100人ぐらいの中国語母語話者の日本語学習者を全員に集めて、紙によるアンケート調査を行う環境が整わないため、筆者の知人の協力を得て、WebのURL、SNSを利用した。辞書の使用やネットで調べることを禁止し、個人情報と回答時間などが保証された条件で、アンケート問題に回答させた。

4.3調査結果と分析

4.3.1 調査の統計

まず、問題Ｉと問題 II の全体の結果[8]から分析する。平均正答率は 62%である。上級者の正答率は 73%、中級者は 62%、下級者の正答率は 53%である。また、各タイプのそれぞれの被験者全体の正答率を計算した。その正答率の高い順に並べると、①「日＝中」(69%) ③「日＜中」(65%) ⑤「日＜=＞中」(61%) ②「日≠中」(59%) ④「日＞中」(57%) の順となっている。 各タイプの正答率は下記の表 3 に示したとおりである。また、各日本語レベルの各タイプの正答率は表 4 のように整理されるが、見やすいように以下の図 5 を作った。

---

[7] 単語「大家」には和語と漢語の意味がある。訓読みで「おおや」の場合は、和語になる（貸し家の持ち主、家主のことである)。「たいか」という発音で、音読みの場合は、漢語になる。この論文では漢語の意味をだけ扱っている。文化庁（1978）によると、漢語「大家」の日本語独自の意味は「大きな家、立派な家」という意味である。また、中国語独自の意味は「みんな、多くの人」である。そして、両言語の意味の重なる部分は「権威、ある分野で特に優れた技能と見識を持っている人」である。

[8]問題 II は正と誤を二択だけ絞った判断課題であるので、直感的に判断する調査対象が少なくない、調査の正確性を確保するために、問題Ｉの単一選択肢課題を作った。２つの質問形式を用いて５つのタイプの漢語の習得状況について考察した。そのため、問題Ｉと問題 II の全体の結果から分析する。

表 3：各タイプの正答率表

タイプの類別	①「日＝中」	②「日≠中」	③「日＜中」	④「日＞中」	⑤「日＜=＞中」
正答率	69%	59%	65%	57%	61%

表 4：各日本語レベルの各タイプの正答率

	上級者	中級者	下級者
①「日＝中」	78%	71%	58%
②「日≠中」	74%	58%	46%
③「日＜中」	75%	64%	56%
④「日＞中」	62%	54%	57%
⑤「日＜=＞中」	75%	60%	49%

図 5：各日本語レベルにおける各漢語タイプの正答率

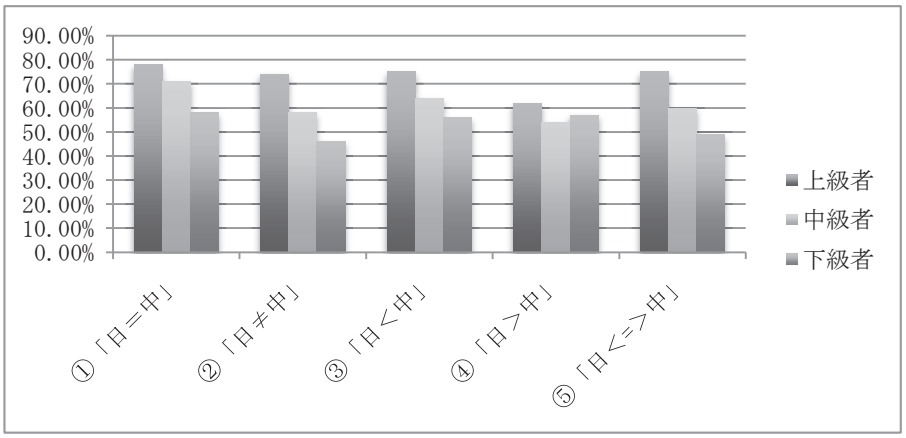


表 3、表 4 と図 5 から見れば、①「日＝中」の正答率は一番高い。そして、日本語レベルと学習歴に係わらず学習者の正答率が低くないので、ここでは李(2006)の結論が検証された。それゆ

え、①「日＝中」の習得は一番容易であると言える。しかし、李(2006)の結論では、②「日≠中」の習得は難しくないことを示していたが、今回の調査結果から見ると、正答率はかなり低い。したがって、②「日≠中」の習得の難易度についてはさらに検討する必要がある。

各タイプの難易度を考察するために、日本語のレベルと日本語の学習歴の二つの面から分析を行った。学習歴における各漢語タイプの正答率は表 6 にまとめたが直観的に理解するように図 7 のグラフで示した。

表 6 学習歴における各漢語タイプの正答率

	①「日＝中」	②「日≠中」	③「日＜中」	④「日＞中」	⑤「日＜=＞中」
1 ヶ月〜6 ヶ月	56%	50%	55%	59%	53%
7 ヶ月〜1 年	62%	53%	65%	55%	56%
1 年 1 ヶ月〜1 年 6 ヶ月	68%	56%	65%	57%	59%
2 年 7 ヶ月〜3 年	77%	71%	71%	60%	68%
3 年 7 ヶ月〜4 年	72%	65%	74%	55%	68%
4 年 7 ヶ月〜5 年	78%	70%	76%	60%	79%
5 年以上	83%	79%	80%	68%	79%

（注：表 1 に示したように、2 年 1 ヶ月〜2 年 6 ヶ月、4 年 1 ヶ月〜4 年 6 ヶ月は被験者の数は 0 である、3 年 1 ヶ月〜3 年 6 ヶ月の範囲では 1 名の被験者しかいないので、この三つの範囲は表 6 に記載しない。）

4.3.2 各タイプ漢語の調査分析

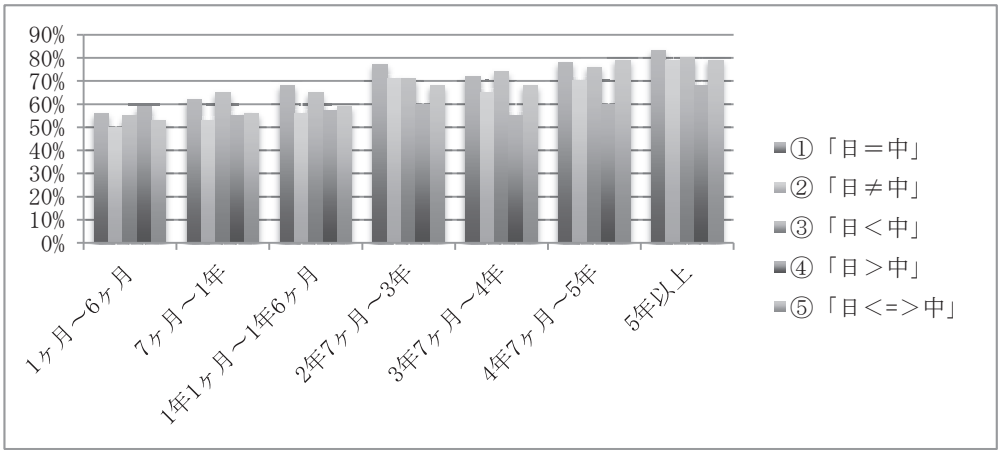
まずは、５タイプ中で正答率は一番低いタイプ④「日＞中」を分析してみる。

仮説４では④「日＞中」タイプの漢語は日本語のほうが意味の範囲が広く、中国語の意味は日

本語の意味範囲の中に含まれているので、中国語母語話者にとって、この類の漢語の習得はかなり労力がかかると推測されていた。この仮説を吟味するために、以下の分析を行った。

図 5 と図 7 から見ると、日本語レベルと学習歴に係わらず学習者の正答率が低いという結果が得られた。また、日本語レベルや学習歴がそれぞれ高く、或いは、長くなるにつれて、習得度が上がるとは言えないことを示していた。そして、④「日＞中」分類に属する I. 2「呼吸」(16%)、I. 22「風景」(32%)、 II. 5「性格」(28%)、 II. 13「現金」(38%) などの正答率はかなり低い。④「日＞中」の漢語は中国語と外見上同じであるが、中国語の意味範囲より日本語の意味範囲の方が広く、中国語の意味が日本語の意味の中に含まれている。学習者が日本語を学習する際に、この類の漢語が出現すると、脳の中に既存する中国語の意味を直接日本語に当てはめるので、日本語独自の意味を理解できなくなる。そして、日本語教師に何回か訂正されたり、日本語では他の意味もあることを教えられたりする。しかし、母語の負の転移が働き、学習者がその漢語に中国語での意味の方に固執するので、誤用率は下がらないと考える。したがって、④「日＞中」類の漢語は日本語レベルと学習歴に係わらず習得困難であろうと考える。仮説 4 は成り立ったと言える。

図 7 学習歴における各漢語タイプの正答率



②「日≠中」類の漢語について、前節の仮説では日本語と中国語の意味が違う場合は認識がしにくいので、このタイプの習得は困難だろうと述べていたが、李(2006)の結論では、習得には難しくないと述べていた。しかし、今回の調査結果から見ると、正答率は4位となっている。かなり低い値を表している。そして、「気配」(35%)、「殺到」(34%)、「看病」(41%)、「迷惑」(42%)、

「講義」（43%）、「用心」（445%）、「下流」（40%）などの正答率非常に低い漢語も存在する。特に「気配」（35%）と「殺到」（34%）のようなは中国語に存在しない語彙の正答率は低い。問題I. 17「人の住んでいる気配はなかった」の「気配」は日本語では「周囲の状況から何となく感じられるようす」の意味を表し、中国語に訳すると「没有人住的样子」ということである。問題I. 14「人々は入口めざして殺到した」の「殺到」の意味は「多数の人や物が一度にどっと押し寄せること」である、中国語に翻訳すると「人们都向入口处蜂拥而至」という意味である。日本語の学習者にとってこの２つのような漢語は中国語で目にしたことがなかったり、脳の中でそれと対応する中国語語彙がなかったりして、意味捜索を行うことができず、意味の推測が困難であったと思われる。

「看病」、「迷惑」、「講義」、「用心」、「下流」のような漢語は中国語では存在するが、日本語と意味が全く違う。中国語での意味はそれぞれ「医者が病気を診る・患者が病気を診てもらう」、「戸惑う・迷わす」、「授業の教材、プリント」、「下心、意図」、「卑しい、下品」である。そして、本調査では「看病」、「迷惑」、「講義」、「用心」、「下流」を日本語の意味を用いて問題IIの正誤判断の設問を入れた。この５つの漢語の正誤判断の問題の正答は全部「〇」を想定した。学習者は上記のような漢語に接した場合、中国語での意味を直接持ち込んで正誤判断を行っている。前節で立てた仮説2は支持されている。

また、各日本語レベルの学習者の正答率を高い順に並べると、上級者（74%）、中級者（58%）、下級者（46%）となっている。また、図5からわかるように、学習者のレベルが高くなると正答率も上がると言える。表6では、学習歴「1ヶ月～6ヶ月」の学習者の正答率が一番低く、「5年以上」の学習者が一番高いことを示している。特に日本語レベルが低く学習歴が短い学習者にとって、この類の調査用語は日本語と意味が全く違うものであるので未知語であり、中国語の意味に頼って判断を行うしかいないことになる。それで、誤用が起こる。これは、母語の負の影響を表している。そして、日本語レベルが高く学習歴が長い学習者にとっては、既習語の割合が高いので、すでに持っている日本語の漢語知識を活用して判断できる。したがって、仮説で述べたように、②「日≠中」の類は習得困難であるが、学習者のレベルが高く学習歴が長ければ、さほど難しくないことを示している。

表6の⑤「日＜=＞中」については、仮説5ではこのタイプの漢語は中国語独自の語義、日本語

独自の語義と日中語共通の語義の３つの意味範囲があるので、習得は容易ではないと述べていた。しかし、正答率は61%であり、全体的の平均数値に近い。５つのタイプの中では、中間の第3位に位置している。正答率から見ると低いとは言えない。また、図6から見ると、日本語レベルが上がるにつれて正答率が高くなり、学習歴で見ても、学習年数が上がるにつれて、正答率が高くなっている。それゆえ、この類の漢語の習得は、さほど困難ではないと思われる。従って、仮説5は支持されず、成り立たないことがわかった。

表6の③「日＜中」の正答率は65%であり、全体的の平均数値より高い。図5から表していたように、学習者のレベルが高くなるにつれて正答率も上がると見られる。そして、表6で、学習歴が長くなるにつれて学習効果が出ることを示した。日本語意味範囲より中国語の意味範囲の方が広い、言い換えれば、日本語の意味は中国語の意味に囲い込まれている。その場合、前の他の３つのタイプより中国語の意味は日本語の意味と関連させやすいし、学習者が母語の知識を使って、この類の漢語の意味を推測できるので、母語の正の影響があると言えるだろう。仮説3で述べた「このタイプの語は、中国語母語話者の学習者は容易的に母語の知識を用いて意味を理解できるだろう」という内容が検証された。

そして、「このタイプの語を使う時に母語にしかいない意味をそのまま日本語に使わないように注意しなければならない」と仮説で述べたように、学習者は注意する必要がある。言い換えれば、中国語母語話者はこのタイプの漢語を習得する際に、中国語と日本語が重なる部分以外の意味もあることを意識して、学習すべきである。

表６の①「日＝中」の正答率は69%である。本調査ではこのタイプには「重要」、「傾向」、「経験」、「訂正」、「返還」「流行」、「状態」、「強調」、「負担」という９つの漢語を取り上げた。全部の設問の平均正答率から見ると、全体５つタイプ中では、正答率が一番高い。そして、図5と図7から見ると、日本語レベルと学習歴のいづれのグループにおいても、学習者の正答率が最も高い漢語であることがわかる。また、日本語レベルや学習歴がそれぞれ高く長くなるにつれて、習得度が上がってしまうという結果も示していた。仮説6の部分では「①『日＝中』日本語と中国語の意味がほぼ同じである。母語からの正の影響を受けるので、中国語の母語話者にとって、習得するのは容易であろう。」と推測されたように、学習者は、このタイプの漢語を学習する際に、中国語の意味と用法が一致する可能性は高いので、持っている中国語の知識を活用して、日本語

の漢語の意味を推測したり判断するのに役に立つと考えられる。つまり、中国の母語話者は①「日＝中」のような漢語を習得することは困難ではない。母語の正の転移といえる。

まとめ

本研究は、中国語母語話者が日本語の漢語を学習する際の母語の影響について、インターネットでアンケートを用いて検討した。その結果は以下のようにまとめられる。

(1) 母語の干渉で習得にくい漢語タイプ：

④「日＞中」（中国語の意味範囲より日本語の意味範囲のほうが広いもの）と②「日≠中」（日本語と中国語の意味が全く違うもの）である。

この２つタイプは漢語の正答率はかなり低かった。④「日＞中」は日本語レベルが高かろうが、学習歴が長かろうが学習がはかどらない状態に止まっているということである。②「日≠中」タイプの漢語については、日本語レベルが低い学習者と学習歴が短い学習者の正答率は低くかったので、その人たちにとって特に習得困難と考えられる。しかし、日本語レベルが高い学習者と学習歴の長い学習者にとって習得困難ではないとわかった。

(2) 母語正の影響で習得やすい漢語タイプ：

⑤「日＜=＞中」（両言語は意味の重ねる部分もあり、それぞれ違いの部分も持つもの）、③「日＜中」（日本語意味範囲より中国語の意味範囲のほうが広いもの）と①「日＝中」（日本語と中国語の意味がほぼ同じもの）である。

今回の調査結果から見ると、この３つのタイプの漢語は、中国人の学習者は母語の知識を利用して、習得の促進をはかっていることを示している。母語の正の影響があるため、他のタイプの漢語と比べると、習得は困難ではないことが明らかになった。そして、正答率から見ると、日本語レベル高くかつ学習歴が長くなるにつれて、習得度が上がっていくことがわかった。

参考文献

大河内康憲(1997)「日本語と中国語の同形語」『日本語と中国語の対照研究論文集』
くろしお出版.

小森和子(2010)『中国語を第一言語とする日本語学習者の同形語の認知処理』風間書房.

武部良明(1997)「漢字国民に対する中級漢字教育」『日本語教育』37、pp. 13-23.

陳毓敏(2003)「中国語を母語とする日本語学習者における漢語習得研究の概観: 意味と用法を中心に」『言語文化と日本語教育.』11、pp. 96-113.

張金艶・谷守正寛(2013)「中国人日本語学習者による日中同形語の誤用について-共有する意味を持つ『参考』『緊張』『注意』『一時』の場合-」『鳥取大学教育研究論集』3、pp. 59-67.

張婧禕(2017)「中国人日本語学習者の漢語同形語習得-同形語類義語(Overlap)を中心に-」『愛知工業大学研究報告』52、pp. 6-13.

文化庁(1978a)『和語漢語』大蔵省印刷局.

文化庁(1978b)『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局.

牧野成一・中島和子・山内博之・荻原稚佳子 (2001)『ACTFL-OPI 入門-日本語学習者の「話す力」を客観的に測る』アルク.

李愛華(2006)「中国人日本語学習者における漢語意味習得-日中同形語を対象」『筑波大学地域研究』26、pp. 185-203.

連國鈞(2013)「台湾人日本語学習者における日中同形語の認知度」『桜美林言語教育論叢』 9、pp. 51-66.

劉思柔(2019)「第二言語習得における母語の影響についての研究--中国語母語話者による日本語の漢語の習得を中心に--」千葉大学大学院人文公共学府 2019 年度修士論文.

（りゅう　しじゅう・千葉大学大学院人文公共学府博士後期課程）

The influence of the mother tongue on second language Acquisition with a focus on Japanese kanji compound words Acquisition by native Chinese speakers

LIU Sirou

Summary:

There are many vocabularies written in kanji in Japanese and Chinese. Some people think that Native Chinese speakers have advantages in learning Japanese. However, for various reasons, even if the kanji characters are the same as Chinese, there are still many cases where the meaning is completely different. Native Chinese speakers have the ability to use their knowledge to speculate the meaning of Japanese kanji compound words, but under the influence of mother tongue, the inferred meaning is not always correct. Therefore, it is necessary not only to clarify how the mother tongue affects when native Chinese speakers learn Japanese kanji compound words, but also to consider what are easy to learn or what are difficult to learn. In this paper, according to the results of the questionnaire survey, I will consider the learning situation and the level of difficulty of each type of Japanese kanji compound words for native Chinese speakers.